

37. 2方向同時X線撮影による膝関節後外側回旋不安定性の検討

金田庸一, 守屋秀繁, 高橋和久
土屋明弘 (千大)

目的: 膝関節後外側回旋不安定性における PCL と後外側支持機構, LCL との関与を検討。方法: 新鮮屍体膝6膝を用い, 脛骨に 2Nm の外旋トルクを加え, 2方向同時X線撮影を行なった。結果: 1. 非切離膝では, 回旋軸を脛骨顆間隆起内側やや後方に認めた。2. PCL 切離後, 外旋角度の増加は認めず, 回旋軸が後方軽度内側へ移動した。3. PCL と LCL, 後外側支持機構の切離後, 外旋角度の増加と回旋軸が内側軽度後方へ移動した。

38. 膝前十字靱帯再建術の脛骨近位骨端線に与える影響について

小野智敏, 土田豊実, 土屋明弘
山崎正志 (千大)
南出正順 (県立東金)

幼若家兎を用いて, 膝前十字靱帯再建術を施行した。再建素材として, 腸脛靱帯 (ITT), 骨片付膝蓋靱帯 (PT) を用いた。両者ともに7割以上の頻度で, 再建後1カ月以内に断裂したが, 断裂しなかった群では脚短縮, 骨端線早期閉鎖が確認できた。また, 縫合糸を撚って作成した人工靱帯使用群でも同様に変化を認めた。幼若膝に対する膝前十字靱帯再建術は再建靱帯が成長しないため, tenocephysisodesis を生じるものと考えられた。

39. 脊髄空洞症動物モデルにおける脊柱側彎変形発生に関する検討

中馬 敦, 北原 宏, 後藤澄雄
南 昌平, 高相晶士 (千大)

脊髄空洞症から脊柱側彎変形の発生に関しその病態を明らかにすることを目的とし, 幼若ビーグル犬6匹に大槽内にカオリンを注入し水頭症及び脊髄空洞症モデルを作製し, カオリン注入後屠殺までの間に硬組織多重ラベリングを施行した。単純X線, CT, MRI の他, 脊髄の病理学的, 脊椎の硬組織学的検討も加えた。脳室の拡大は5匹, 脊髄空洞の形成は3匹にみられ, 脊柱の著明な側彎変形を1匹, 軽度の側彎変形を2匹に認めた。

40. ヒト骨芽細胞様細胞に対する骨形成因子 (rhBMP2) の作用について

山崎正志, 後藤澄雄, 寺門 淳
金 民世, 後藤憲一郎 (千大)

ヒト皮質骨から単離・培養した Bone Cell に対する rhBMP-2 の作用を, 増殖能, 基質合成能および骨芽細胞としての機能について検討した。その結果, BMP は Bone Cell の増殖能, 基質合成能を亢進させ, 骨芽細胞としての機能を維持させた。したがって生体内において皮質骨細胞に対して BMP が過剰に作用した場合, 異常骨増殖病変が発症・進展し得る可能性が考えられた。

41. 四肢に発生した血管肉腫の2例

昌山健次, 梅田 透, 石井 猛
(国立がんセンター・東)

四肢に発生した血管肉腫の2例を組験したので報告する。症例1: 32歳, 男性。1992年1月右上腕の腫瘍に気づき, 近医で切除するも2度再発。当院にて肩甲離断術を施行し, 化学療法施行するも, 肝転移のため死亡, 発症後約14か月であった。症例2: 49歳女性。生下時より右下肢に浮腫あり, リンパ管腫と診断されていた。1992年12月右大腿に発赤出現。その後, 皮膚の腫瘍出現し, 増大したために, 当院にて右大腿切断術施行, 発症後9か月, 再発・転移を認めていない。病理組織像は, cellularity が高く, mitosis も豊富で, 深部まで浸潤している。血管肉腫は全肉腫の1%以下であるが, リンパ浮腫後に生じるタイプはさらに頻度が低い。また, 再発, 転移が多く, 極めて予後が悪いため, 早期の適切な治療が必要と考えた。

42. 脛骨骨幹部骨肉腫の1例

井上 雅俊, 木下知明, 三橋 徹
(千大)

館崎慎一郎, 斎藤 忍
(県がんセンター)

症例は13歳, 女性, 単純X線上 fibrous dysplasia 様の medullary sclerosis を呈した skip lesion を伴う Enneking の stage III B の脛骨骨幹部骨肉腫。HD-MTX, IF-OS, CDDP+ADR による術前化学療法後, 開胸術及び rotationplasty を施行。rotationplasty は脛骨が短断端であっても有効な患肢機能が得られた。千葉県がんセンターの骨幹部骨肉腫は全骨肉腫の8.3%を占め, 単純X線上 medullary sclerosis が多く skip lesion も高頻度に認められた。